
みこみこ

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みこみこ

【NNコード】

N6706C

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

岩城神社で働く巫女二人、そんな二人の日常の一ページ

「つおりやあああ——！」

掛け声と共に気合の入った美羽のドロップキックが優衣に炸裂。優衣はそのまま倒されて美羽は華麗に着地する。

そして美羽はまだ倒れている優衣にの元へより、胸襟をつかんで無理やり立たせる。

「あんた、今何してた？」

凄い剣幕で問いただしていく美羽を目の前にしたらもう笑うしかないのか、優衣は笑って誤魔化そうとする。

はあー、まつたくいつもいつもこいっは。

「優衣、あなた自分の職業を言つてごらん」

「ほえ？」

「ほえ、じゃなくって」

「えーと、一応、巫女さん」

「一応じゃなくとも、あなたは巫女なの」

「あははっ、そうだね」

「つで、今あなたがやるべき仕事は？」

「……境内の掃除」

「そうね。じゃあ、なんで境内で近所の子供たちと野球をやつてるのかな？ しかも篠をバットにして」

またしても笑つて誤魔化そうとする優衣に対し、美羽は大きな溜息を付いた。

まあ、美羽の気持ちも分からなくも無い。なにせ優衣は仕事をサボつて近所の子供たち野球をやつていたのだから。

「じつちは一生懸命に仕事してるのにこいっはー！」

「じゃ、そんなワケで、このお姉ちゃんには仕事が残つてるから、あなた達は他の場所で遊びなさい」

えへつ、と不満を垂らす子供達だが、美羽は優衣を前に突き出し

「うつなりたい？」と脣迫染みた言葉を口にする。

思わずひるむ子供達。けどそれもしかたない、今の優衣は先程の攻撃で背中に優衣の両足の跡がはっきりと残つており、しかも倒れた時に転がったので全身が汚れている。

「じゃあ、美羽姉ちゃん。またね～」

「つて、ちょっと待つて、そんなにあつさりと見捨てないで！」

あつさりと引き下がる子供達にまだ泣きつゝとする優衣を引きずり、美羽は別の場所へと移動する。

「まつたく、ちょっとびぐりいijiyan。あの子達がまた遊ぼうつて来ただから」

優衣は巫女装束に付いた土埃を払いながら、美羽に文句言いく出す。「つで、自分の仕事を放り出して遊んでたわけだ

「放り出してないよ。ちょっとした休憩だよ」

「あなたの休憩は篠で野球をすることか」

「まあ、気分転換ということで」

「いや、もういいから素直に謝れ」

「すいませんでしたー！」

あつさりと白旗を上げる優衣。そんな優衣を見て美羽は「うんうん」と勝ち誇ったように首を縦に振る。

「はい、素直でよろしい」

「でもや、純粋な子供達に遊ぼうつて見つめられると断れないじや

ん

「その前に己の本分をわきまえろ」

「いや、違うよ、そうじゃないよ。なんて言つか、私は子供達の純粋な目に弱いんだよ。まるでこう、捨てられる子犬が拾ってくれないかな、拾つてくれないかなって田で訴えているよ」

「あの子供達はそこまでピソンチなのか？」

「うつ、こ、や、あの……」

「なあ、いいかげん、自分の非を認めないか」

「いやー、分かつてゐるんだけどね。いざ誘われると断れなくて」

「本当に誘惑に弱いな、あんたは」

「あははっ

やつぱり最後は笑つて誤魔化す優衣を美羽は呆れた目線で見ていた。

はあ、やつぱり最後はこれか、こいつは。

「はいはい、じゃあそろそろ仕事に戻りましょウ」

「そうだね。じゃあ、境内の掃除を…」

「ちょっと待て、境内の掃除は私がやる。だからあんたは社務所を手伝え」

「えー、なんで?」

社務所の仕事がよっぽど不満なのか優衣は不満を漏らす。

そんなに社務所の仕事が嫌なのか、こいつは。

「なんで社務所が嫌なのよ?」

「だつて、伝票整理とかの単純作業つてつまんないし、眠くなるじやん

「一応言つておぐが、あんたはこの岩城神社の巫女として雇われており、神社の仕事をする義務があるんだぞ」

「だから境内の掃除を…」

「あんたはさつき境内の掃除をサボつてただろ

「今度はちゃんとやるよ」

「つい先程までサボつてた奴の言葉を信じじろと?」

「ぐつ!」

さすがにそれを言われては言い返す言葉が無いのか、優衣は泣きそうな表情を浮かべて美羽に訴える。

「はいはい、じゃあ私は境内の掃除をしつくから、あんたもちゃんと社務所にいきなさいよ」

優衣の訴えを美羽はあつさつとスルー、箒をかっさらりそのまま境内へと向かつていった。

ぐつ、けど自業自得な分だけに何も言えない自分がひょつと悔しい。

結局、優衣はとぼとぼ社務所へと向かつた。

それから数時間後、境内の掃除を全て終えた美羽は社務所へと戻つた。

「境内の掃除、終わりました」

社務所に入つた美羽を古城神社の神主、大輝が「お疲れ様」と迎え入れる。

「美羽、お帰り~」

美羽はそのまま優衣のところまで行き、ちゃんと仕事をしているのかを確かめる。

「おっ、今度はちゃんと仕事をしてるみたいね

「う~、さつきのはたまたま誘われただけだよ」

文句を言しながらも優衣の手は止まらず、そのまま作業を続けていふ。

「けどや、いつやつてると思つんだけど」

「何よ?」

「なんでこいつ単純作業つて眠くなるんだろうな。ちからもの凄い睡魔が」

「睡魔つて、おまつ、ちゃんと仕事をしてるんだろうな?」

「う~ん、多分大丈夫」

「多分じゃなくて、ちゃんとやれよ」

「あははっ」

はい、いつもどおり最後は笑つて誤魔化しました。

「けど、私なんて単純作業ほど集中できるけどね」

「やつぱり、人によつて違うのかな?」

「その前にお前のやる気が問題なんぢゃないか」

「ふつふつふつ、美羽さん、そいつはちょっと違いますよ

「じゃあ、何なのよ？」

「私の場合は集中しすぎて途中で精神力が死んでしまう」

「結局ダメじゃない、それ」

「けど、何かやりきったって思わない？」

「思わないわよ！」

「というか一人ともそろそろ仕事に戻ってくれない」

『はい、すいません』

大輝の注意に一人は声をそろえて誤ると、それぞれ自分の仕事へと戻つていった。

結局、こんな感じで岩城神社の毎日は過ぎていくのだった。

(後書き)

なんだろう、何か巫女ネタが続いているような気がするけど、そんな事をまったく気にしない、巫女萌えの葵夢幻です。

今回は楽しい巫女の日常をテーマにして書いてみました。けど、実際にこんな二人が居たら面白いだろうな。

そんなワケで、ここまで読んでください、ありがとうございます。
そしてこれからもよろしくお願ひします。

以上、葵夢幻でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6706c/>

みこみこ

2010年10月8日15時49分発行